

マルコによる福音書 14:32～42

「取るべき杯」

2026年7月12日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

キリスト者の生活において最も大切なことの一つにお祈りがあります。祈りは神との対話ですが、その内容はさまざまです。感謝、願い、信仰の告白、悔い改め、賛美。嘆きもまた祈ってよいことです。そして、主の御心を求める、ということもまた祈るべき大切なことです。信仰者が罪を犯すのは、祈って主に御心を求めなかった時ではないかと思えます。がそもそも罪を犯すとは主の御心に反することですから、当たり前だと言えるかもしれません。なすべきこと、なすべきでないことを主の御心に求める。どちらに行くべきかを主の御心に求める。それは人生全体にもかかわることになります。主の御心を求めて生きるのがわたしたちの祈りの生活、祈りの人生です。

わたしたちの祈りの姿は主イエスの祈る姿の写しです。主イエスが祈られるからわたしたちも祈ることができます。主イエスが祈ることをわたしたちも祈ります。そして、主イエスはいつも、父なる神の御心を求めて祈っておられました。福音書には主イエスが一人で御心を求めて祈っておられる姿がさまざまに記されています。本日の箇所もオリーブ山のゲツセマネというところで主イエスがお祈りをなさる場面です。けれども、この時の主イエスの祈りはいつもと様子が違うところがあります。父なる神のみ心をもとめて祈る時、主イエスはいつもお一人でした。けれども今日は、弟子をいっしょに連れて行かれます。そして、一緒に祈ってほしい、とおっしゃったのです。一体主イエスがお祈りをなさる時、弟子の祈りによる支えなど必要だろうか、と思えます。けれどもそもそも主イエスは、ご自身の宣教のために弟子をおつくりになったのです。お一人でもできたかもしれないけれど、「あなたたちが必要なんだ」とおっしゃりお招きになったのです。そして弟子たちはすべてを捨てて従ってきました。この大事な時にも、大事な時だからこそ、主イエスは弟子たちに祈ってほしいと願われました。しかし、今回は弟子たちは主の招き、祈りへの招きには応えることができなかったのです。神はいつでもわたしたちの祈りを待っておられます。「あなたに祈ってほしい。わたしはあなたの祈りを聞くから」。問題は祈りが聞かれるかどうか、ではありません。祈るかどうかです。主イエスの祈りの招きに答えられなかった弟子たちは、この後主イエスを見捨てて逃げてしまいます。けれどもここで祈ることができなかったことそのものが主イエスを見捨ててしまったということだと思えます。そしてこれはわたしたちの祈らない姿でもあります。

いつもの主イエスの祈りと違うところがもう一点。今、主イエスはいよいよ苦しみをお受けになります。この夜の過越しの食事が最後の食事だと悟り、また裏切る者が現れることをはっきりとお示しになりました。ある意味覚悟をお決めになっていたのです。けれども、今日の祈りは悲壮なものになりました。引き裂かれるような思いで祈られました。ご自身の心の思いと、神の御心が一致しない。父なる神が示される御心は分かっておられる。

けれどもそれは自分の思いと違う、神がお示しになる道が恐ろしいのです。

このゲツセマネで、弟子たちのそばで、ひどく苦しみ、悩み、弟子たちにその思いを吐露なさいます。「わたしは死ぬほど苦しい」。そして祈られました。できることならこの時を過ぎさせていたいただきたい、この杯をわたしから取りのけてください、と。この箇所です。わたしはいつもたちどまってしまいます。主イエスご自身死を覚悟なさっていたはずですが。それでもなお、死を目の前にしておそれられる。父なる神に、「杯を取りのけてください。この死の定めから逃れさせてください」と祈られた。ここにきて主イエスがびびっておられるのではないと思います。ただ単に死ぬということがこわい、などということではないと思うのです。覚悟を決めてエルサレムに来て、最後の一週間を過ごした。最後の食事、弟子とした。いよいよその時が来る、その緊張の高まりは、この後来る十字架の死というものの理不尽さを一層はっきりとさせたということでしょうか。主イエスが恐れられたのは、神の国の到来をここまで宣べ伝えてきた。神がいかに人々を愛しておられるかを表してきた。そして本当にみんながこの神の国にはいるために、ご自分の命をかけて、引き受けなければならないものがあるのです。それは御子であるはずの、つまり神でえられるはずのご自分が、何の罪もないのに、罪をかぶって死ななければならない、ということです。体の死の恐怖でもなく、運命の理不尽さなどではなく、人間の罪があらわにされ、ご自身は全く罪がないのに、その罪の結果を引き受けなければならないのです。これが神がなさることだという。神ご自身がなされることが正しくないように思える、それが主が感じておられる恐れなのです。あなたがなさることは正しいことなのですか。このまま歩いて、あなたは本当に正しい神であり続けられるのでしょうか。

ある力強い説教者、わたしもいつも大いに参考にしてそこから学んでいる説教者がこうおっしゃいます。「ゲツセマネという名は、とても親しいものです。しかし、この名前をあげてそれから語り始めるマルコ福音書の記述は、何度読んでも、暗記するほど読んでも、私たちにとって慣れるということはないのではないかと。わたしも牧師になって30年、このゲツセマネの祈りについて数えることもできないくらい説教をした。けれども正直に言うならば、年をとって読めば読むほど、この主イエスのお姿について、十分に解き明かす言葉を自分はもっているであろうか、と戸惑うくらいです。戸惑いは深まるばかりです」と。わたしもこの主イエスの苦悩の中の祈りはいつもひっきり、ひっきり、本当にこういう理解でいいのか、と迷いながら読み、説いています。しかし、この説教者は慣れることがない、とおっしゃいましたが、それでいいのではないかと、慣れてはいけないのではないかとすら思うのです。十字架に慣れてしまっているところがあるのではないかと、反省させられます。主イエスの十字架が私たちの信仰の中心です。十字架がわたしの罪の赦し、救いだと信じます。それだけに、「十字架、十字架、受難、受難」と慣れてしまっているのではと。

(わたしの反省はいいのですが)、この箇所ともう一つ十字架の主イエスの祈り「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という言葉は、杭のように聖書につき

ささっています。決して慣れない言葉であり、必ず立ち止ませられるのです。「あなたは、この箇所をどう受け止めるのか。主イエスの祈りと十字架をどう信じるのか」と毎回問われる思いがします。

弟子たちは、待っている間に寝てしまいました。主イエスは「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい」とおっしゃいました。ここでも同じ用に、単に眠気に負けずに勝ってお祈りしていなさい、という単なる体のことではないと思います。そもそも誘惑というのは、神を信じないように、不信仰へと誘う働きです。目を覚ましていているというのは、すでに13章で主人が旅に出て、突然戻ってくるたとえで聞いたように、いつ主が来てもいいように備えておくこと、信仰を確かにしておくことでした。主イエスはこの意味で「目を覚ましていなさい」とおっしゃったに違いありません。弟子たちが誘惑に負けて寝てしまった。目を覚ましていられなかったのです。つまり主イエスを見続けることが、信じ続けることができなかった。祈ることができなかった、というのはそういうことです。そして祈ることができなかったから、誘惑に負けたから、ペトロは主イエスを知らないといい、ほかの弟子たちも主イエスが逮捕されたら見捨てて逃げてしまうのです。ぐるぐるまわっているようですが、祈らなければ誘惑に負けて主イエスから離れてしまいます。そして主イエスを信じなければ祈ることはできません。主の御心を求めて祈る。その御心を受け入れる。これは難しいことのように思えるかもしれませんが、けれどもなお、わたしたちが生きるべき道がここに 있습니다。そして神は必ず御心にかなう道を祝福してくださる。

弟子たちは誘惑に負けてしまいました。けれども、このゲツセマネの祈りにおいて、最も誘惑を受けたのは主イエスご自身に違いありません。神の御心に反しているのを知りながらも、「杯を取りのけてください。あなたの御心のままには行けません」と祈られたのですから。眠りこけて祈らないことが神の御心から離れること、弟子たちへの誘惑であるならば、この十字架から逃げ出すことが主イエスへの誘惑であったに違いありません。もし主イエスがここで十字架から逃げておしまいになっても、指導者たちは悔しがるかもしれませんけれど、周りの人間はだれも主イエスを責めないでしょう。それどころか弟子たちは、命の危険から逃げられてよかった、とほっとするでしょう。けれども、それでは救いはどうなるのか？考えてもしかたないことかもしれません。けれども、主イエスは誘惑には負けられませんでした。「しかし、私の望みではなく、御心のままに」と祈られました。文章を見ると、続けて書いてあるのであっさり読み進めてしまいそうになりますが、決して主イエスはこの言葉をすらすらと、決まり文句のように祈られたのではない、と思います。苦しみの中、「それでも御心のままに。」と祈られたに違いありません。

わたしたちの救いはこの主イエスの祈りの上に成し遂げられました。そして、「御心のままに」と祈るこの姿は、私たちの祈りの姿となりました。わたしたちは、主イエスが味わわれたのと同じ十字架の死の恐怖や、絶望を知る必要はありません。全部赦されているのです。神が御自分をお見捨てになるなどと考えする必要はありません。主イエスがすべてを担ってくださったのです。けれどもなお、自分の罪を忘れることはできません。自分の

罪のために、主イエスが神の御子なのに御心に反するという誘惑にあい、深い恐れと絶望を味わってくださいました。

この主イエスの苦悩の祈りによって、わたしたちはますます神が祈りを聞いてくださることを心確かに祈ることができます。いつでも、神の御心を求めて祈ることができます。誘惑に勝ってくださった主イエスの祈りの上に、目覚めて祈り続けることができます。